

# 人が人らしく、よりよく生きるための社会科学習を求めて

## ～「ひと、もの、こと」に本気で取り組む子を育てる～

松尾 光孝

社会科の学習は、人が人らしく、よりよく生きるためのものだという。今回、私はその意味するところを探るために実践を続けていった。その結果得たものは、子どもの生活の中から社会科の単元は始まること。子どものみとりと着目児の必要性の再確認。そして何よりも子どもたちが本気になって学習に向かう姿勢にするための手立てだった。スーパーマーケットの学習では、自分たちで課題を生み出し、それを解決するために奮闘する子どもたちの様子をたくさん見ることができた。このことは、本気になって社会科という学習に取り組んだのだと考えていいのではないかと考えている。

だが、単元の目標に本時で至ることができたかと言えば否で、話し合いの場における子どもたちの学習のあり方や教師の指導のあり方をどうすればいいのかという課題を見つけることができた。

キーワード：本気 子どもの生活 子どものみとり 課題作り 話し合うポイント

### 1. 人が人らしくよりよく生きるための社会科学習とは？

#### 1.1. 私らしい社会科学習の構築の必要性

社会科の学習を行うにあたって、社会科を研究してこられた先輩方からお聞きした「社会科の学習は、結局人が人らしく、よりよく生きるためのものだ」と言われた言葉が印象的に私の頭の中にはある。しかし、私にはその言葉が今ひとつのみ込めなかった。

正直に言えば、今まで社会科という教科を真剣にやってきたとは言えない。その状態で今回社会科にどっぷりと取り組む機会を得た。まず私自身が自分のキャリア等、吟味する必要があった。私は社会科学習が問題解決学習であることは分かっていたものの、それ以外は何も分かっていないことに気がついた。そこで社会科に対する考え方はたくさんあると思うが、その学習のあり方を研究し、自分らしい社会科学習を構築したいと考えた。

#### 1.2. 私が考えていた社会科学習

今年度4月当初に考えていた社会科学習は次の通りである。

まず①教材開発が必要であり、教材が見つければ②単元構成を考えなければならない。その単元構成の中、③本時をどこに配置し、さらに④学習課題はどうするのか。子どもたちが課題に向き合ったときの⑤ひとり学習、⑥グループ学習、そして⑦本時での話し合いの場面…⑧話し合いの仕方、教師が話し合いのポイントを探り、どう入っていくのかも大切であろうと考えていた。⑨最終的に社会の問題に対してどう結論づけていくのか、そこに⑩達成感・充実感はあるのか。

社会科として考えられたことが上の10点であることはお粗末なことかも知れないが、これが私の現状であ

ることを受け入れようと考えた。特にその10点の中でも①教材開発、②単元構成、④学習課題の部分が弱いと考えたため、3点を重点的に意識しながら取り組もうと考えた。

その3点が、「人が人らしくよりよく生きるための社会科学習」の糸口になるかどうかは分からなかったが、結局は実践しながら探る以外にないと思い、取り組むこととした。

### 2. 子どもの生活の中から単元は始まる

1学期に実践した「岡公園をもっと楽しい場に」の単元は色々な意味で私が考えねばならないことをたくさん示唆してくれた。実践そのものはお世辞にもうまくいったとは言えない。しかし、その失敗の中から得た物は多かった。

#### 2.1. 子どものみとりと着目児の必要性の再確認

結局「公園」の実践では子どものみとりをやったのだが、みとりができたと言うにはほど遠かったのかもしれない。単元構成も授業者側の思いが強く、子どもの書いた作文は読み、授業中に発表される意見は聞いているものの真に子どもたちがもっている公園に対する思いや願いをくみ取っていたとは言えなかったと考える。また、着目児を設定せずに学習しなかったことも指導助言の先生に指摘された。着目児に関しては勉強不足だが、社会科においては取り組んだ単元によって子どもがどのように変容したかをみる必要がある。その点をおろそかにしていたことに気がついた。

子ども理解という意味で自分に足らなかったことに気がついたため、カルテというほど大げさなものではないが、社会科以外のことでも子どもについて気がついたことは書き留めていくことにした。子どもの日頃の生活を知ることが社会科の教材化に役立つと考えたためである。

## 2.2. 子どもの生活から単元を始める重要性

公園の実践をするにあたり、私自身公園に関する書籍を数冊読んだ。またインターネットでも検索してそれまで「児童公園」と呼ばれていたものが、「街区公園」と呼び名を変え、公園の価値観が今と昔とは違ってきていることを知った。そこに子どもとの意識にズレがあり、教材にできるポイントがあるのではないかと考えた。しかし、本当にズレていたのは私の思いと子どもの公園に対する思いだった。2.1でも書いたが、「公園」の実践は授業者側の思いが強すぎて子どもとの思いとの間に逆にズレが生じてしまったことが失敗の原因である。今回、公園もこちらで「岡公園」と決めてしまったが、子ども一人ひとりをもつ「公園」像は岡公園とは限らない。なぜ、岡公園から出発する必要があったのか、今となっては考える。

岡公園から入ったことをよしとしても私は、「岡公園」または「公園」に関する事前のアンケートをとったり、作文を書かせたりすることなく学習をスタートさせた。つまり、子どもたちの公園に対する思いや考えを知ることなく見切り発車したようなものである。

このことから、2.1にも共通して言えることだが子どもの生活を抜きにして、社会科の単元構成をすることはできないことに気がついた。

## 2.3. 本気で社会科学学習に取り組む子に

このような状態で臨んだ「公園」の学習であるから子どもたちの様子はやはりどこか他人事であり、本気で「岡公園」のことを考えようとする態度が見られなかった。本時での話し合いにおいても客観的な意見は少なく、主観に基づいた意見が大勢を占めた。主観に基づいた意見が全くダメだとは思わないが、ほとんどの意見がそうだったことを考えると結局子どもたちが「本気」で「岡公園」に取り組んだとは言えない。次の授業研究においては、子どもたちが本気で学習に取り組まざるを得なくなるよう、その1つの手段としてまずは子どもの生活から入らねばならないと考えた。

## 3. 単元学習の実際

「本気」という言葉は抽象的で分かりにくいかも知れない。そこで、「本気」という言葉を私がどのように考えているのかを整理しておく必要がある。まず、国語辞典に書いている記述をそのまま書くと『まじめな気持ち。本心。正気。真剣。』である。この言葉なら子どもたちにも伝わりやすく、分かりやすいと思った。要は他人事ではなく、自分の問題としてやる気持ちになってほしいという思いが根底にあるのだが、無理強いすることもダメだと思われた。そこで、子どもたちには「今自分の持っている力全てを出して取り組むこと。無理する必要はない」が「本気」なんだと訴えた。これならば、無理して自分を出すこともないので、子どもの実態も捉えることができる。社会科教科

提案にもある「ひと、もの、こと」に積極的に訴えることも本気だろうが、何をやったらいいのか分からないと悩むことも本気だとした。「公園」の学習の後、「スーパーマーケット」の学習に臨むが、何人の子が本気になるのではなく、何人の子の本気をみとれるかが大切であると考えながら取り組んだ。

## 3.1. スーパーマーケットの学習について

スーパーマーケットの学習は子どもたちが経済という側面から社会とつながっていることを学ぶことである。生きていくためには食べることが不可欠でほとんどの家庭が食材を購入している。またもちろんのことではあるが、子どもたちはお金に興味津々である。自分たちがほしいおかしや本、ゲームもお金を媒介として手に入れることができる。スーパーマーケットそのものには子どもたちを本気にさせる要素がたくさんあると考えた。

## 3.2. 学習は買い物調べから

前回の実践の失敗をせぬよう、子どもたちの生活を知るために買い物調べから始めることにした。校区をもたない本校の特徴から、買い物をするスーパーマーケットが多岐にわたるため、買い物調べをしてクラスの家での人たちが一番よく行くスーパーマーケットの秘密について調べようという学習の展開は望めないとは思っていた。しかしそれでも子どもたちのおうちの消費活動の様子を知らないことには単元構成することができないと思い、買い物調べを1週間行った。予想通り、スーパーマーケットへ買い物へ行く人が多かったのだが、A というスーパーマーケットにたくさん行っているというように絞り込むことはできなかった。(A というスーパーマーケットでも市内に数店舗あり、同じA スーパーでも違う店舗であるということもあった)ここで分かった重要なことは、どの家庭であっても決して一つのスーパーマーケットを利用していると言うことではなく、その目的や場合によって複数のスーパーマーケットを利用しているということだった。

ただ、困ったことに今回お世話になろうと決めていたスーパーマーケットに買い物に行っている子がほぼいなかった。しかし、そこは逆手にとって「なぜ、みんなのおうちは、このスーパーに買い物に行かないのだろう。和歌山市の人は誰もこのスーパーには行っていないのかな？」と問いかけ、子どもたちの「そんなことはない。確かめよう」という言葉から学習を始めた。

## 3.3. 数度の見学で、子どもたち自身が全体学習での課題作りそしてひとり学習へ

そのスーパーマーケットには都合2回、見学をしに行った。見学をしたことで、決してお客さんが来ていないわけでないことを知る。一方で、他のスーパーマーケットと比べると割高であることも気がついた。そ

んな中一人の子が、同じ会社なのに名前が違うスーパーマーケットであることを見つけ、値段が割安なことにも気づいた。

「どうして同じ会社なのに名前が違い、値段も違うのだろう」

という疑問を子どもたちはもつ。しかも、お世話になっているスーパーマーケットの店長から

「もっとお客さんを呼ぶためにはどうしたらいいのか、考えてくれないだろうか」

と宿題をもらっていたこともあり、

「同じ会社で安く売れる店もあるのだから、安くすればいいのではないかな」

と言う子もいれば、

「いや、安く売ることにはできないと思う」

という子もいて今にも話し合おうという雰囲気になっているところを、

「まだみんな安くできるか、できないのかの証拠をつかんでいない。もうちょっとしっかりと調べてから話し合おう」

と話し合いを押しとどめたところ、子どもたちから、『お世話になっているスーパーマーケットは、品物を安くできる！できない！』

で話し合いたいと言いはじめた。いつもは先生が前に出て本時の課題作りをしている感のあった子どもたちは、今回は自分たちで全体学習で考える課題を作ったという思いが強かったようで、その日から課題に取り組む姿勢に勢いが出てきた。みんなとは別にスーパーマーケットを訪れて調べる子、地元のスーパーマーケットと比較しようとする子など、自分たちなりのひとり学習が展開されていった。また、本時でどれだけ自分の意見をみんなに訴えかけられるかが勝負だと投げかけたことが、発表の仕方にも子どもたちなりの工夫が見られた。子どもたちはスーパーマーケットに対してそれぞれが自分のもてる力をしっかり出して取り組もうとしていた。そこには本気で、課題に取り組む姿があったと考えている。

### 3.4. 全体学習の場では

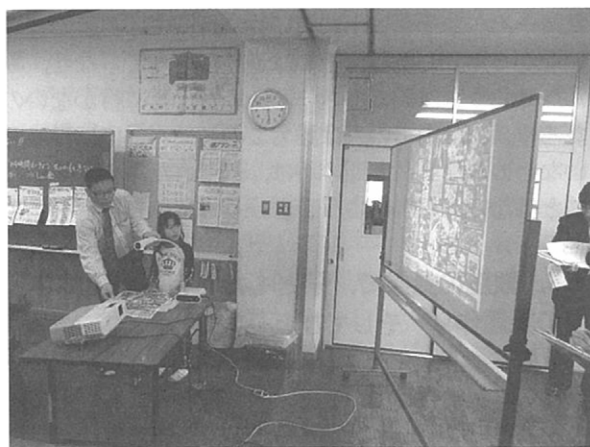


写真1 チラシをもってきて実物拡大機に投影

全体学習の場では、1時間のうちに全員が発表しようという気もちがあり、全員が課題に向かって参加し、解決しようという空気に満ちていた。発表の仕方もそれぞれ工夫を凝らしたものとなった。

ある子はそれぞれのスーパーマーケットのチラシをもってきて実物拡大機に投影してその違いを紹介した。

輸入物のおかしや果物が値段を高くしている要因だとして実物を買ってきて説明する子がいた。

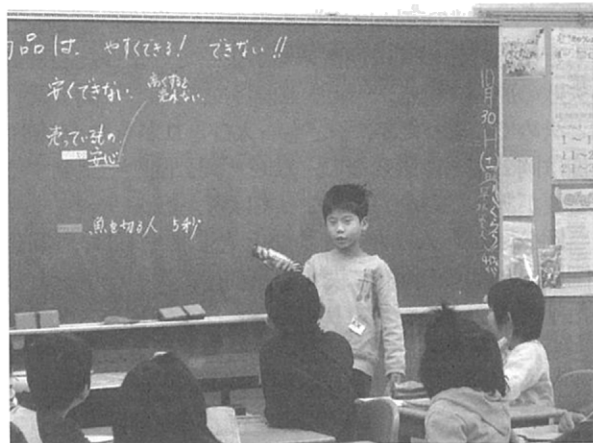


写真2 輸入物のおかしを買ってきて説明する子

その子たちの話を聞いて、子どもたちは確かに輸入物のお菓子は見たことがないと納得した。また、ドリアンを買ってきた子の話を聞いたときは、3000円もする値段の高さにも驚いていたが、初めて見た子もいて、その姿や形、特ににおいにも圧倒されたようで果物の王様の登場が話し合いの場に華を添えた。

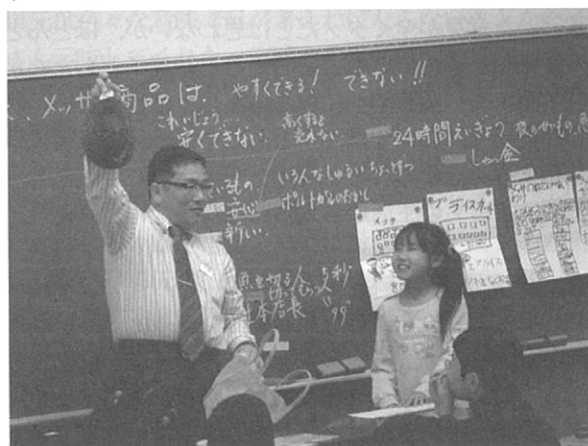


写真3 輸入物の果物を買ってきて説明する子

実際の商品の値段の違いをそれぞれのスーパーマーケットからレタスを買ってきてみんなに提示した子もいた。このとき、同じ商品が60円以上の差で売られていることに子どもたちは驚いた。

2つのスーパーマーケットの違いを自分なりのグラフにまとめて、紹介した子もいた。グラフ化すると視覚に訴えられて分かりやすくなっている。この子の発

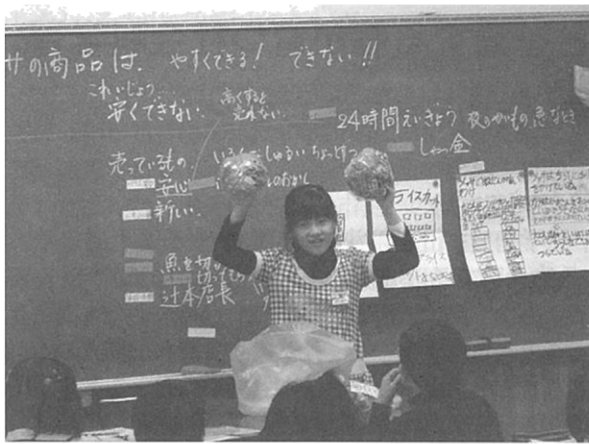


写真4 それぞれの店からレタスを買って説明

言から、課題解決に向けた言葉が話し合いの場に出てきた。

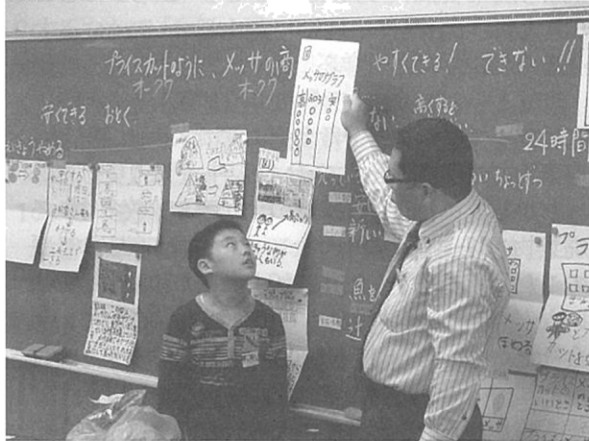


写真5 自分なりのグラフにまとめて、紹介

このことから、実物や具体物を提示しながら話し合うことが、中学年の子の発達段階には必要ではないかと考えている。

#### 4. 単元学習の考察

ここで、授業後半の授業記録を載せてみたい。

T19: あってる?。ほなそろそろまとていこう。

C33: この図はA店の人が牛や豚を育ててる図を表しています。こんな風に自分の会社で商品を作ると安くなると思います。

T21: 自分のところで作ると安くできると思うんやな。

C34: でも、A店には高級な物が売ってるから、安くできないと思う。

C35: つけたし。高級な物が多い。

C36: ぼくはやっぱり安くできないと思います。B店のように安くしたら、B店が売れなくなって、会社のグループの中でA店とB店のケンカになると思います。A店は高い物を買いたい人が来るんだと思います。

T22: 同じ会社のグループやったな、どっちも。他に?。

C37: 私は、A店に絶対、他の店がくっついていると

思います。他の物も一緒に買っていくから、安くできないと思います。

T23: 高い物の続きかな。

C38: A店は高い物が多くて、家の近くの所はふつう。B店は安い物が多い。この3つには役割があって、安くできない。

C39: 最初、安くできると思ってたけど、できないに変わった。A店は安くなったらB店になってしまう。

C40: 私も安くできないと思います。A店にはこだわりがある。こだわりがなくなったらA店じゃなくなる。

C41: ぼくは、できると思います。…

C42: 話は戻るんやけど、店長ができないって言ってたけど、全部じゃなくて、ちょっとできる場所もあると思う。

C43: ぼくも、3つの店に役割があると思います。

C45: A店は便利で品がよく、安心できる。B店は安いけど、A店をやっぱり安くはできない。このままで良いと思う。

読んで分かるように「スーパーマーケットには役割がある」というこの授業のポイントとなる言葉が出ているのに、そこへ全員が向かっているのではなく、他の話題で話そうとしている子が話し合いの中に入ってきている。大きな話の流れは「役割」という言葉をキーワードに進もうとしているが、子どもたち全員の気持ちがあるところに乗っていないのである。このことは、

- ① 授業者の発問・支援の問題
- ② 子どもたちの聞き方・意見の出し方・話し合いのやり方が十分でないこと
- ③ 三位一体の対話が不十分であることが考えられる。

#### 5. 成果と課題

スーパーマーケットの授業で子どもたちは自分のもてる力を使って取り組んだ。そういう意味では本気で取り組めたと考えたい。また、1時間の学習中に全員が発表し、授業後ももっと話し合いたいと子どもたちが言ったことは評価できると考える。

しかし、結果的には1時間のうちに目標とする「販売の仕事が、自分たちの生活を支えていることを知り、それらの仕事に携わっている人々の工夫やこだわりを考える。」ところまで子どもたちが到達することはできなかった。このことは、私自身がやはり真摯に受け止めなければならぬ。できれば、子どもたちだけで目標に到達してほしい。そうでなければ教師の出番はどうあるべきか。日頃取り組むことは等、考える事は多い。そして、次の課題としなければならないと考えている。

#### 参考文献

2009 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 33